

チュータリングの報告書をコミュニケーションツールとして使用することについての提案

渡邊浩之* 鈴木克明*, 戸田真志*, 合田美子

熊本大学大学院教授システム学専攻

西南学院大学

＜あらまし＞学生チューターの勤務報告書を単なる事務連絡ではなく、チューターの質の保証につながるツールとするために改善した。「学習目標」「学習者の様子」「反省点と改善点」などの項目を追加し、担当教員とチューターが双方向でコメントする。これにより、勤務報告書は、「大福帳」にみられるコミュニケーションツールとなり、「チューターの自己努力、自己変容の過程の確認」や「双方の信頼関係の形成」といった効果が期待される。

＜キーワード＞ 大福帳、学生チューター、チュータリング、コミュニケーションツール リフレクション、勤務報告書

1. はじめに

近年、高等教育の現場では、学習支援に際して様々な場面で学生チューター（以下「チューター」という。）が活用されている。また、チューターに対するトレーニングが行われており、筆者らは、組織的なサポートがない場合でも自学でスキルを身につけることができるようにチュータリングガイドライン+自己評価シートを作成し、ある程度の効果を得た（渡邊ほか 2014）。しかし、詳細なアンケートは、学期に一度であり、毎回ごとのチューターのセッションにおいて学習者の様子や反省点の収集はできていない。これができれば、より細やかなチューターへの支援が可能だと考えられる。

そこで、本研究では、この課題の解決のために、「学習目標と内容」「リフレクション」を要素の核にしたコミュニケーションツールである勤務報告書（以下「報告書」という。）を作成し実施することにした。

2. 対象者

今回の対象である A 大学の法学部では、チューター（同学部では SA と呼称するが、ここでは「チューター」と呼称する。）による学習支援をおこなっている。なかでも導入科目および専門書科目の学習会は、チューターが、テキストに沿っ

ていけば授業の補講のような形式でおこなうことが多く、かつ、専門科目研修への参加、管理等も行うことが望まれている。これらは、チューターにとっても負担が大きい。なお、学習会チューターは、全 22 名（男性 女性 14）である。

3. 先行事例

ここで、注目したのは、「大福帳」と呼ばれるコミュニケーションのツールである。これは、織田(1991)が、考案したものであり、基本項目として①学年、番号、氏名、学部②授業回数と自由記述（授業内容、講義の進め方等に関する感想・要望等のコメント）③学生の自由記述に対する教師用コメント欄が設定してある。これは、学生に配布したシートに学生が 5 行程度のコメントを書いて授業後に教員に渡し、次の授業の際に教員が朱書のコメントを書いて返却するというものである。その効果としては、①欠席防止効果・授業出席促進効果、②積極的受講態度の形成効果、③教師と学生の信頼関係形成効果、④授業内容と学習定着の促進効果、⑤自己努力、自己変容の過程の確認効果、⑥授業担当者に及ぼす授業内容の充実促進効果があげられている。後に向後（2007）は、100 名以上の大規模クラスや e ラーニングにおいても試した結果、同様の効果が認められるとしている。ただし、これらは正課授業の受講生と教員との仕組みである。

さて、この仕組みをチューター育成にも適用できないだろうか。これは、受講生をチューターに見立てる訳である。そうすれば、「大福帳」でのコミュニケーションツールとしての運用も適応可能だと考えられる。すなわち、授業における学生と同様にチューターも「自己努力、自己変容の過程の確認」や「教員と学生の信頼関係形成」などについて効果が確認できるかもしれない。そこで、今回は、この仕組みを学生チュータートレーニングの一部として取り入れることにした。

4. 報告書の要素

次に報告書の要素である（表 1）。大きく 2 つのエリアに分かれている。基本情報は、日付、在学番号、名前、勤務日、場所、担当業務、受講者数、学習範囲および学習目標である。勤務詳細内容は、勤務詳細内容は、学習支援の内容、学習者の様子、反省点と改善点である。また、教員のコメントは、メールの本文でおこなう。ただし、現段階では、一覧性は確保していない。

基本情報には、「学習目標」の項目を加えた。その理由は、チューターに対してセッションを行う前と後での学習者の変化について、意識してほしかったからである。これを特定すると、「学習支援内容」が決まる。続けて「学習者の様子」では、学習者への目配りをし、最後に「反省点と改善点」でリフレクションを行うことで、その後のセッションに生かすことができる。前期実施前のガイダンスでは、書き方を提示した。なお、報告書の適用によるチューターの行動と期待される効果は表 2 のとおりである。

5. 対象者への返信

第一筆者は、全員にメールでコメントを返信した。具体的には「“学習者が理解できるようになる”という学習目標ですが、理解できたかどうかをどうやって確認しますか。例えば”テキストを見ながら説明できるようになる”など観察可能な形で記述してください。」といった内容である。最初の頃の報告書は、学習目標の提示がうまくできていなかったが、回を重ねるごとに「板書を見ながら自分の言葉で説明できるようになる。」「ノートを参照して、口頭で説明できる。」というように変化した。

6. 今後の展開

前期のセッションは、7月中旬まで実施される。終了後に、対象チューターに対して、アンケ

表 1 報告書の要素

基本情報	在学番号	氏名
	勤務日	勤務場所
	担当業務	受講者数
	学習範囲	学習目標
勤務詳細内容	学習支援の内容	学習者の様子
	反省点と改善点	

表 チューターの行動と期待される効果

チューターの行動	期待される効果
事前準備	学習目標、セッション内容を予習し、プリント等のツールを準備する。
セッションの実施	準備した内容を学習者へ定着させる。
報告書へ記入	内容をまとめることによる記述力の向上と省察をすること。
報告書を担当部署へ提出	締め切りを順守すること。
メールでコメントを確認	コメント内容を次回のセッションや報告書記入の参考にする。
教員は、報告書へ書かれたチューターのコメントを読み、各人へコメントを返信する。	

ートおよびインタビューをおこなう。その上で、返信のコストも含めて、このツールの効果を検証する予定である。

謝辞

本研究は、平成 29 年度科学研究費助成事業（奨励研究）課題番号：17H00225 の一部である。

引用文献・参考文献

- 織田揮準（1991）大福帳による授業改善の試み
大福帳効果の分析 三重大学教育学部研究紀要 教育科学
- 向後千春（2006）大福帳は授業の何を変えたか
日本教育工学会研究報告集
- 向後千春（2007）e ラーニング授業でコミュニケーションカード「e 大福帳」を使う 日本教育工学会研究報告集
- 渡邊浩之 鈴木克明、戸田真志、合田美子（2014）
チュータリングガイドラインの開発と形成的評価について、リメディアル教育研究